「西域のロマンと史実」－悲劇の将軍・李陵とかれの末裔－

冨 谷　至
京都大学 名誉教授（中国法制史）

Ⅰ　漢匈奴戦争

匈奴とは

言語：アルタイ語系、　人種：コーカサス人種
匈奴 xiong nu ？　　hun, hunnus, hunni　種族？
遊牧民族　族長　単于（撐犂孤塗単于、撐犂＝天、孤塗＝子、単于＝広大）
単于庭（左賢王・右賢王）　人口 30 万～100 万、騎兵 6 万～30 万、　「匈」＋奴

単于

匈奴單于
漢書音義曰：「單于者，廣大之貌，言其象天單于然。」
単于庭　左賢王　右賢王

Ⅱ　漢初の漢と匈奴の関係

平城の恥

始皇帝により、いったんは、長城の外に追いやられた匈奴であったが、秦が滅んで項羽と劉邦が覇権をめぐってしのぎを削っている間隙をぬって、オルドス一帯に勢力を伸ばしてきた。そして BC201 年秋九月、匈奴の冒頓(ぼくとつ)単于は、大挙して中国に攻め込んでくる。当時北方の防衛にあたっていた韓王信は匈奴の強さを身をもって知っていたがために戦争を回避して和解を高祖劉邦に進言するのだが、項羽を破って得意絶頂の彼には、それは軟弱・弱腰としか思えなかった。匈奴に投降した韓王に腹をたてた劉邦は、無謀にも自ら三十二万の歩兵を率いて匈奴に目にものみせんと、出陣していく。そして匈奴の騎兵四十万に平城(へいじょう)で包囲され絶体絶命の窮地に陥ってしまうのである。遊牧騎馬民族に歩兵で立ち向かう、匈奴騎馬軍団の怖さを全く知らない愚行としか言いようがない。

漢は単于夫人を仲介にして、何とか命脈をたもつのだが、世に「平城の恥」とされるこの事件は、その後半世紀にわたり漢にはトラウマとなり、漢は匈奴に対して屈辱外交、土下座外交を強いられることになる。匈奴に定期的に貢ぎ物を献上し、また匈奴単于の側室として皇室の女性をさし出さねばならなかったのである。

漢遺單于書，牘以尺一寸，辭曰「皇帝敬問匈奴大單于無恙」，所遺物及言語云云。中行說令單于遺漢書以尺二寸牘，及印封皆令廣大長，倨傲其辭曰「天地所生日月所置匈奴大單于敬問漢皇帝無恙」，所以遺物言語亦云云。

【漢、單于に書を遣るに，牘は尺一寸を以す。辭に曰く
「皇帝敬問匈奴大單于、無恙」
遺るところの物および言語は云云。中行說は單于をして漢に書を遣るに尺二寸の牘を以す。及び印封、皆な廣大にして長からしむ。倨傲にして其の辭に曰く、
「天地所生、日月所置、匈奴大單于、敬問漢皇帝、無恙」】

→　亡命漢人の存在

Ⅲ　武帝　第一次匈奴戦争（BC129―119）

周到な準備

① 張騫の西域派遣　建元２年（BC139）　（下図参照）
大月氏との通謀

② 軍事演習
昆明　昆明池：雲南昆明の南蛮夷との戦争で、滇池（昆明池：周囲 150 メートル）の水戦の準備に、長安にその 10 分の１の人造湖をつくり予備演習をおこなう。

③ 騎馬戦と騎士
馬の飼育と騎馬兵（騎射）の養成
Cf.　匈奴を征伐する目的で、馬を盛んに飼育し、飼育係が不足し周辺の軍から徴発した。
衛青　霍去病　→　北辺出身

【河西回廊の制圧】

衛青・霍去病の遠征、凱旋

河西回廊の制圧

亡我祁連山，使我六畜不蕃息

失我燕支山，使我嫁婦無顔色　　（『史記』索隠所引『西河旧事』）

（我が祁連山（きれんざん）を亡う，我が六畜（りくきく）をして蕃息せざらしむ

我が燕支山（えんしざん）を失う，我が嫁婦をして顔色なからしむ）

【辺境の防衛】

烽燧、兵士の配置

Ⅳ　第二次匈奴戦争（BC99―87）

大宛　汗血馬

重なる悲劇

貳師将軍　李広利

李陵

司馬遷

悲劇 ― その一

天漢 3 年（前 99）、貳師将軍李広利を総大将とする 3 万の騎兵隊が、酒泉（甘粛省）から出陣した。帝国の総力をあげての匈奴潰滅戦争であったが、その折り、輜重隊長の役には満足できなかった李陵は、自ら武帝に申し出て、配下の歩兵 5000 人を率いて別働隊を組織し、西北ゴビの城塞居延（内モンゴル）から北に向かっていく。しかし、不幸なことに、匈奴の主力軍とぶつかり、孤軍奮闘、善戦したものの、軍は玉砕、李陵は匈奴の捕虜となってしまうという結果に終わる。

1 年の後、李陵救出の軍が出されるが成功せず、しかも失敗の原因は李陵が匈奴に寝返ったからだとの誤報が伝えられたのである。反逆と見なされた李陵は、反逆罪にたいして設けられた族刑（父母妻子兄弟が連坐して斬首となる）が適用され、家族は誅殺されてしまう。見方によれば、亡命者の反逆といったトラウマの犠牲であるのだが、李陵はそれを機に、実際に匈奴の側に寝返ってしまい、祖国には二度ともどらなかった。

李陵が匈奴の人となってしまったころ、漢からの使節として蘇武という人物が匈奴のもとにやってくる。ある事件に巻き込まれた彼は、そのまま匈奴に幽閉され、匈奴への亡命を強いられる。その説得役が李陵であったが、蘇武は最後まで応じず、漢への忠誠を貫き通し、苦節 20 年ののち、ようやく祖国に帰還した。ゴビを舞台としたふたりの対称的な生き様、友情と別離を綴ったものが、「漠北悲歌」すなわち中島敦の『李陵』である。

悲劇 ― その二

李陵の悲劇は、別の今ひとつの悲劇を招来する。はじめ、李陵軍の善戦が伝えられた朝廷内では、彼に対して拍手喝采、皆が賞賛していたのだが、やがて玉砕の悲報が伝えられると、沈鬱な空気となり、さらに李陵捕虜の事実が判明すると、こんどは悪しざまに李陵を罵り、果ては罪人あつかいするまでにかわっていった。その雰囲気のなかで、ひとり敢然と李陵の弁護にまわり、彼の奮闘をたたえ、捕虜になったとしても、かならずや匈奴に一矢を報いるに違いなく、またそのつもりで李陵は捕虜という屈辱に甘んじたのだと弁護したのが、司馬遷であった。そこまではよかったのだが、司馬遷は、その弁論のなかで、李広利に対する誣告罪を犯してしまう。具体的に司馬遷のどういった言辞が李広利を誣告したことになったのか、史書は黙して語らず、後世さまざまな憶説が出されている。ただ、李陵の善戦を主張することが、戦果なしに終わった総大将李広利をことさらに貶しめ、そこに誣告という虚偽の非難が生まれたことは、確かであろうし、史書もそう示唆している。　誣告罪に問われた司馬遷に死刑が宣告されるが、死の代替として、宮刑、つまり性器を切除する刑が存在しており、司馬遷は、生き恥をさらすことを承知で、この忌むべき宮刑の道を選び、宦官となるのである。すでに取りかかっていた『史記』を完成させねばならない使命を果たそうという、苦渋の選択であった。

悲劇 ― その三

李陵に端を発し、司馬遷へと飛び火した悲劇は、今度は、李広利をも巻き込んでいく。　後期匈奴戦争の総大将である李広利は、紀元前 99 年、97 年と大軍をもって出陣したのであるが、いずれもさしたる戦果を得られずに戻ってきた。やがて、彼の女婿の父である丞相劉屈釐が、皇太子擁立をめぐって冤罪を着せられ、李広利は、おのが大功をあげることで、劉屈釐を救わんとして、紀元前 90 年、4 万の騎兵と 9 万の歩兵をもって出陣していく。しかし、功をあせったからか、結果としては敗戦を喫し、李広利自身も捕虜となってしまったのである。そして彼は、匈奴の祭祀における人身御供として非業の最期を遂げることになる。じつはその裏には、匈奴単于（王）が李広利を気に入り、寵幸しつつあるのを妬んだ亡命漢人衛律がしくんだ陰謀があったのである。　圧倒的な優勢のうえで進められたはずの後期匈奴戦争、だれの目にも勝利は約束されたものと映っていた情況にあって、以上の事柄は、どうしようもない運命の成せる悲哀、漠北悲歌そのものだった。

Ⅳ　史実と伝説

河西回廊に栄えた国々　五胡十六国の時代

(1)　　隴西の李氏 —— 李氏一族への憧憬

涼武昭王李玄盛

西涼（400～421）　　李暠(りこう：字玄盛)　漢人で隴西出身、後涼、北涼時代に敦煌太守となり独立して西涼を建国する。

405 年　東晋への使者

418 年　鎮西大将軍酒泉公

華北奪還の希望の星

（2）李陵と関係　→　隴西の李氏

『漢書』李廣傳「李廣、隴西成紀の人。」

『晋書』李玄盛傳「隴西成紀の人。漢の将軍広の十六世の孫」

『旧唐書』高祖本紀「(李淵)、姓李氏、諱淵。其の先は、隴西狄道の人。涼武昭王暠の七代の孫なり」

『文選』(6 世紀　梁)「李少卿答蘇武書」

「李少卿答蘇武」に見える李陵悲話ができあがったのが、南朝梁の時代であった。それは、西涼の存在、そこで勇躍する隴西の李氏は、華北奪還がもはや現実不可能な夢となってしまった南人にとっては、英雄とうつったのである。その李玄盛は、あの強敵匈奴で武勲をあげた李廣、その孫李陵の子孫であった。李玄盛の出現は、李陵を悲劇の英雄として描くことに与った。

さらに、その個人が活躍した河西回廊、西域——そこは南朝漢人にとって遙かに遠い、かなたの地であることが、現実とはかけ離れた想像の世界となっていく。**漠北、ゴビ、西域ロマンがここに完成する。**

范雲（梁　451－503）　『文選』巻三十一

寒沙　四面を平らかにして　　飛雪　千里を驚かす
風は断つ　陰山の樹　　霧は失(かく)す　交河の城
朝に駆る　左賢の陣　　夜に薄(せま)る　休屠(きゅうと)の営
昔　前軍の幕に事え　　今　嫖姚(ひょうよう)の兵に逐(したが)う
道を失すれば　刑は既に重く　　遅留すれば　法は未だ軽からず
頼むところは　今の天子　　漢道　日びに休明ならん

「涼州詩」　唐：王之渙

黄河　遠く上る　白雲の間
一片の孤城　万仞の山
羌笛なんぞ須いん　楊柳を怨むを
春光　渡らず　玉門関

「従軍行」　　唐：王昌齢

青海の長雲　雪山暗し　孤城　遙に望む　玉門黄沙　百戦　金甲を穿つも　楼蘭を破らざれば　終に還らじ

以上